

東京バッハ合唱団 月報

[第 665 号] 2017 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 665

November 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

宗教改革 500 年の《ロ短調ミサ曲》

第 115 回定期演奏会へのお誘い

大村 健二 (団員)

10 月 31 日は宗教改革記念日です。1517 年のこの日、アウグスティヌス派修道会に属する神学教授マルティーン・ルターが、「95 か条の提題」を教会に提出し、宗教改革の火ぶたが切って落とされました。今年はそれからちょうど 500 年ということで、ドイツをはじめ多くの国のプロテスタント教会では、この 1 年間、さまざまなイベントが催されているようです。

先月号の月報でもご案内しましたが、11 月 3 日に東京・渋谷の日本キリスト教団聖ヶ丘教会で開かれる「宗教改革 500 周年記念・講演と音楽の集い」(日本エキュメニカル協会主催)には、われわれの合唱団もお招きをいただき、ピアノ伴奏で《ロ短調ミサ曲》からの抜粋を歌わせていただきます。この催しの 3 週間後の、われわれの定期演奏会(右掲)の準備に支障がないよう、同曲を選んだのですが、「宗教改革 500 年」そして「エキュメニズム(教会一致)」というテーマのなかで、この選曲は的確だったのではないのでしょうか。

この日のパンフレットのために、選曲の趣意などに触れた解説を乞われました。内容は、そのまま、来たる 11 月 23 日の定期演奏会へのお誘いにもなるかと思いますので、流用させていただきます。

総合教会のミサ曲、バッハ《ロ短調ミサ曲》

宗教改革 500 周年の記念の年にバッハの《ロ短調ミサ曲》を演奏させていただけることはとても意義深いことです。

ご存じのとおり、J・S・バッハ(1685-1750)はプロテスタント教会ルター派の礼拝のための音楽を数多く残した音楽家です。なかでも約 200 曲残されている「教会カンタータ」がその中心にあり、合唱曲や独唱曲が小編成のオーケストラや鍵盤楽器をともなって、毎週日曜日や祝祭日の礼拝のなかで演奏されました。そのつど、それぞれの主日、祝日の教会暦に沿った内容の、自国語(ドイツ語)の台本が用意されましたので、この点が、ラテン語による定式化されたミサの固有文と通常文とで構成されるローマ・カトリックの典礼、そのなかでの「ミサ曲」の在り様とは異なっていました。

ところが、このバッハに、ラテン語のミサ通常文の全文をテキストとした、まさに中世以来のいわゆる完

第 115 回定期演奏会 (創立 55 周年記念)

《ロ短調ミサ曲》—日本語演奏—

S 光野孝子、A 谷地畝晶子、T 鏡貴之、B 山本悠尋
Org 草間美也子、東京カンタータ室内管弦楽団
東京バッハ合唱団、Cond 大村恵美子

11 月 23 日 (木/祝日)

14:00 開演 (13:30 開場、16:30 終演予定)

杉並公会堂

(JR 中央線/地下鉄丸ノ内線「荻窪駅」下車、北口徒歩 7 分)

■ チケット: 前売 3500 円・当日 4000 円 (全席自由)

■ 申込み: 東京バッハ合唱団事務局 (上欄参照)

全「ミサ曲」そのものが、ただ 1 曲だけ残されていました。本日お聴きいただく《ロ短調ミサ曲》です。プロテスタント教会に属する作曲家が、カトリック教会の伝統ののちの音楽を、しかも今日の視点で見れば、人類の音楽遺産の頂点にも位置すべき、超絶した内容の作品を書き上げていたのです。全体をまとめて演奏した記録はありませんし、バッハ自身も作曲の意図には具体的に触れていません。しかし、バッハの晩年は、諸ジャンルにおいて、彼が到達した音楽の高みを総合し、時代を超えた作品へと普遍化してゆく作業に没頭しています。バッハ学の最前線は、この《ロ短調ミサ曲》こそは、バッハが、カトリック・プロテスタント両宗派の壁を超えて、普遍の信仰に捧げた作品だったのではないかと、という評価に至っています。本日の「集い」にふさわしい演目と言えましょう。

このたびの日本語上演は、2011 年末の初演につぐ再演です。この年は <3.11> の身震いと原発事故への憤りもおさまらない中での公演でした。世界と日本とで 6 年の月日が流れた今、「主よ 憐れみたまえ」(ミサ曲冒頭)と「平和をわれらに」(最終)の祈りと願いは、残念ながら、より切実になってしまいました。

お運びいただければ、幸いです。

月報 11 月号 CONTENTS

- ・要約「カントル・バッハ」第 5 章 (松尾茂春) …p.2-4
- ・次回公演予告 … p.4

要約『カントル・バッハ』 連載 [5]

マニーフィカト (わが魂は主をあがめ)

ポール・デュ・ブシェ [著]

大村 恵美子 [訳]

要約・紹介：松尾 茂春 (団員)

<内容>

第1章：ルターのもとでのヨーハン・セバスティアン
(マルティン・ルター、先祖たち、誕生～リューネブルク時代)
……連載 [1]、月報 653 号 (2016 年 11 月号)

第2章：修業時代 (アルンシュタット、ミュールハウゼン)
……連載 [2]、月報 655 号 (2017 年 3 月号)

第3章：偉大なオルガニスト (ヴァイマル)
……連載 [3]、月報 660 号 (2017 年 6 月号)

第4章：ブランデンブルク協奏曲 (ケーテン)
……連載 [4]、月報 662 号 (2017 年 8 月号)

◆第5章：カントル・バッハ (ライプツィヒ)
……連載 [5] (今回)

第6章：音楽の献げもの (フリードリヒ大王の客人、歿後)

第5章

カントル・バッハ (ライプツィヒ)

人口2万の大学都市ライプツィヒ、そこはプロテスタンティズムの牙城であり、音楽的中心でもありました。そこにあるトーマス教会のカントルには聖歌隊長のほか、この都市の全教会の音楽監督 Director musices の役割もあり、1212年のトーマス学校創立以来、歴代の偉大なカントルたちの伝統によって据えられた大きな影響を及ぼしてきました。これまでのカントルだったヨーハン・クーナウが1722年6月5日に死去するに伴い、バッハはその職を志願するのです。

立候補までには6ヵ月かかりました。それは魅力的な地位である一方、落とし穴にも満ちています。ケーテンではレオポルド侯ひとりが主人であったのに比べ、ここでは市参事会や聖職者会議などからの20人ものお偉方に仕えることとなります。さらに基本給は年俸100フロリント、これまでの4分の1ほどです。そこに結婚式や葬式での報酬、学校寄宿生たちの支払う週12グロシェンの納付金などの分け前、依頼を受けた作曲の報酬、楽器の維持費・修繕費、オルガン鑑定への報酬が加わりますが、子供がすでに5人いる家庭にとってはおつましいものでした。

採用側ではダルムシュタットの宮廷楽長・グラウプナーやハンブルクのカントル・テレマンなど他の候補者を好ましく思っており、バッハは渋々受け入れられることとなります。

・「最上の者を得られなかったのだから、中位の一人で我慢するほかはないでしょう」

市参事会の一人によるこの評価に、バッハへの誤解が集約されています。オルガニストとしてのバッハは評価されず、ライプツィヒ市参事会にはバッハの作曲した作品もおそらく知られていなかったでしょう。前任者たちに比べて大学教育を受けていないことで比較され、ケーテンのカペルマイスターという社会的威信も、他の2人の候補者より小さく、バッハは次善の策として受け入れられたのでした。

バッハはトーマス学校生徒に対するラテン語の授業を引き受けることにも署名し、地位の獲得のため、市長の許可なしに市を離れない旨約束し、必須となる神学の試験に合格します。

1723年4月22日、バッハは選出されました。それは主にラテン語授業に関する彼の善意をもとにした決定で、1人だけが作曲家としてのバッハを思い出して、契約書に「教会音楽を“あまり劇場的”に作曲せぬよう」と規定します。1723年6月1日、バッハは正式に就任したのでした。

・嘆かわしい状況のこと

学校ははなはだ無秩序、無規律の状態にありました。校長のヨーハン・ハインリヒ・エルネステーは年老いて無力、建物は老朽化して荒れ果て、人数に比べて小さすぎる状態でした。3つの学級が食堂兼用の1つの広間で過ごし、寄宿生たちは1つのベッドに3人寝ます。悪環境で栄養も悪いなか、子供たちはたやすく病気に倒れるのでした。彼らは悪天候にあってもすべての葬儀に讃美歌を歌って立ち会うものとされ、大部分の者たちは施しの金を得ようと街角に立ちました。

カントルの住居は、2階の校舎の左翼にある5部屋で、低学年の学級とは石膏の薄い壁で仕切られているだけでした。毎日のレッスンを1人で受け持つ週もあり、大きな重荷だったろうと思われます。

・カンタータを週1曲ずつ……総計300曲に近い

音楽監督 Director musices の職務は膨大なものです。市内のあらゆる教会における宗教音楽のプログラムを編成します。毎日曜日や祝祭日に、典礼が4時間もかかるトーマス教会やニコライ教会のために1曲のモテットかカンタータを作曲しなければなりません。さらに聖金曜日のための受難曲、埋葬式のためのモテット、結婚式のための音楽、注文を受けたオルガン曲などがあります。

バッハはその都度すばらしい創作エネルギーを發揮しました。たとえばライプツィヒでの最初のクリスマスの、ただ1回の機会のために3曲ものカンタータを提供し、同時に晩課には新作の《マニーフィカト》を演奏しました。バッハは、音楽外の数え切れないほどの束縛のほかに、さらに規則的に作曲する義務を課される中で300曲近くのカンタータを生み出しました。残念ながらそのうちの多くが、散逸やバッハの死後の

息子フリーデマンによる売却などにより失われ、現存するものは200曲ほどとなっています。

教会暦に沿った膨大なプログラムで、降誕節（アドヴェント）の最後の3つの日曜日と、四旬節（レント）の5つの日曜日は例外となっていますが、その時期にはクリスマス、復活節のための特別な準備が必要で、バッハに休息の時はありませんでした。

・**バッハが大学と交渉をもち始めたときから、もめごとは始まった**

市内にある全教会の内、ただ1つ、大学付属の教会である聖パウロ教会は、市の役人や音楽監督からも独立した状態を求めています。しかし大学はバッハの契約の3年間、その奉仕を受け入れる一方、規定どおりの報酬の全額支払いを拒否し、聖パウロ教会の正オルガニストだった凡庸なゲルナーとの折半としました。バッハは大学への苦情をザクセン選帝侯に呈するものの、彼は大学を是とし、バッハは大学教会への興味を失ってしまいました。

しかし、このエピソード以降、学生たちは大学や教会の権威の鼻先で、個人的に世俗カンタータを次々とバッハに委嘱するようになります。また、彼らは器楽奏者や歌手としてバッハに奉仕しました。これらの協働者たち（そこには在学中だった2人の息子、すなわちフリーデマンとC・Ph・エマーヌエルも含まれます）のおかげで、バッハは野心的な企画の1つを首尾よくなしとげることができたのです。

・**1729年の聖金曜日、《マタイ受難曲》は聖トーマス教会で演奏された**

C・Ph・エマーヌエルによれば、バッハは5つの受難曲を作曲したはずですが、そのうち3曲（マタイ、ヨハネ、ルカ）が現存（ただし「ルカ」はバッハ作品としては疑問視）します。その中でもとりわけ《聖マタイによる受難曲》（BWV 244）は、バッハの全宗教音楽の鍵をなすものです。しかし、後世の音楽家たちに最上の遺産となっているこの作品に、当時の人々はほとんど感激せず、せいぜい「劇場的」な性格への辛口の評価がされたくらいでした。そもそも人々は多数集まることなく、多くは今日では名前すら忘れられたフローバーという作曲家による受難曲を聴きに行ったのでした。

この作品は近視眼的なライプツィヒの名士たちには巨大すぎました。会堂両翼の2階席と2つのオルガンを持つ教会の形に着想を得て、バッハは2つの合唱、2つのオーケストラ、2つのオルガンに対話させる構成とします。後の演奏の際の編成では、分かれた2群それぞれにオーケストラ17楽器、12人の歌手、加えて冒頭のコーラル〔おおきよきこひつじ〕に3人から6人の歌手という編成になり、演奏時間は長大なものになりました。

この受難曲のテキストの主要部分は「マタイによる福音書」26～27章からなっており、それを8つのエピソードに分けました。台本作者ピカンダーにテキストを依頼し、12のコーラルを挿入しました。

■音楽監督の職務は膨大なものです。市内のあらゆる教会における宗教音楽のプログラムを編成します。毎日曜日や祝祭日に、典礼が4時間もかかるトーマス教会やニコライ教会のために1曲のモテットかカンタータを作曲しなければなりません……。〔図11ワルター「音楽辞典」132の扉〕



・《受難曲》の稲妻は、ライプツィヒの名士たちの目をくらませる

なにかもっと当たりのよいものの方が良かったのですが、バッハは自分の魂をむきだしの形でさし出したのです。市参事会は硬化し、気分を害し、日を追ってバッハを傷つけました。次の1つの事件がこれらを物語っています。

春ごとに行われるトーマス学校への新入生試験で、有力者たちはバッハが提出した合格者リストを無視した形で合格者を決めてしまいます。さらに、カントル・バッハがラテン語の授業を自身で引き受けていないと非難、上司たちはバッハを責め、収入をかなり減額してしまいました。

この最終事態を知らないバッハは、有名な覚書「よく整った教会音楽を構成するものについて。現在の衰退に関する若干の公平な考察とともに」を送ります。しかし市参事会には何も伝わらず、かえって憎しみを引き起こし、合唱隊の報酬はそのまま、新教会に任命されていたゲルラッハの報酬を2倍に増やしたのです。

・「私は神の助けによって、他の地に幸運を探したい」
バッハは「音楽を好きでもない不可解な気質のお偉方」から逃れられればと期待して、今はロシア皇帝の大使となっている、幼な友達のエールトマン宛に手紙を書きますが、エールトマンは何もできず、ザクセン

に留まることとなります。バッハの音楽は極端に“モダン”だと評されました。

幸いにも事態は推移、1730年6月8日、トーマス学校の新校長として、J・マティアス・ゲスナーが任命されました。

・締め付けがゆるむ

すぐれた文献学者で輝かしい人文学者であるゲスナーは、トーマス学校の改革を行います。新しく2つの階を設けて校舎を拡張し、一番古い建物を改善し、生徒たちには音楽が人間と天国の合唱隊との仲立ちであると説明し、音楽を愛し敬うよう勧めました。学校の雰囲気はすっかり変わってきました。バッハはラテン語の授業と監督の時間を免除され、この素晴らしい人物と楽しく仕事をすることができるようになりました。この交流によってバッハは当時流行の人文主義にも関心を持つようになりました。

1731年、バッハは《クラヴィーア練習曲集》という名で、新しい6つのパルティータ (BWV 825-830) を印刷させます (第I巻)。4巻からなる《クラヴィーア練習曲集》の最後の巻は、見事な「アリアと種々の変奏曲」で、不眠症に悩まされたカイザーリング伯爵のために演奏したバッハの弟子の一人、J・テオフィルス・ゴルトベルクの名をとって《ゴルトベルク変奏曲》(BWV 988) と名づけられています。

・1730年代はバッハに大きな改善をもたらす

テレマンが始めたコレギウム・ムジクムは、ライプツィヒ市内の飲食店カフェハウス・ツィンマーマンで毎週金曜日に良質の音楽会を行っていました。バッハはそこで指揮をし、《農民カンタータ》や《コーヒーカンタータ》などの世俗カンタータを作るようになります。ライプツィヒ大市の期間に集まる客はその演奏を聴こうとひしめき合い、バッハの息子たちを含む若い芸術家たちの才能の発揮される場ともなったのです。

・この時期の最高の企画はやはり《大ミサ曲》

アウグスト強大王の死に続く喪の期間中、バッハは《ロ短調ミサ曲》の仕上げを行うことができました。1733年7月に、彼は新しい選帝侯に〈キリエ〉と〈グロリア〉部分を贈ります。ルター派の礼拝はカトリックの典礼から範を得て、そこから主要な儀式を取り入れたもので、バッハの時代にミサ通常文のラテン語のテキストが広く用いられていたということは、ローマ・カトリック教会のテキストが、ルター派の典礼的礼拝にも、カトリックの礼拝にも仕えるのだと暗黙裡に了解されていたということです。バッハにとって、福音の真の意味は、キリスト教の様々な信仰告白を対立されている葛藤を超越した、神観念の一つの可能な統一によって得られるものでした。彼の音楽は3つの文字 S.D.G. すなわち “Soli Deo Gloria” (ただ神にのみ栄光) なしには理解できません。

・悪い日々へ逆戻り

1734年にバッハの支持者・保護者だったゲスナーが

ゲッティンゲン大学に任命され、新しい校長として J・アウグスト・エルネスティーが着任し、すぐさま対立が発生します。そこには、トーマス学校がもう時代に適応せず、教材が増えて学問と音楽の目標を同時に満たすタイプの教育機関が時代に合わなくなってきた背景もありました。生徒を叱責した副指揮者の扱いでバッハとエルネスティーは対立、争いは2年におよびます。

1736年9月、選帝侯となる王子に宛てて宮廷楽長の地位を求める依頼状をバッハは再提出し、許可がおりました。11月19日、ドレースデンで、王室およびポーランド王兼ザクセン選帝侯の宮廷作曲家に任命するという証書がバッハに与えられました。これが役立ったのかはわかりませんが先の争いは消滅。しかしエルネスティーは音楽的には対立し、バッハは音楽監督の仕事から遠ざかってしまいました。

・バロックに対する若い世代の反乱

1730年代に苦難と失望が相次ぎます。息子の一人、ゴットフリート・ベルンハルトが24歳で死亡、ゴットフリート・ハインリヒが愚行に走ります。さらに定期月刊誌『批評的音楽家』(Critischer Musikus) の1737年5月14日の第6号で、バッハのかつての弟子の一人シャイベがバッハの音楽を批判しました。それは彼らが古臭いと感じる音楽に反逆して、感覚の喜びと表現の単純さを第一とする新しい世代の代表者から突きつけられたものだけにバッハにはこたえました。バッハは応答を友人に任せ、多くの音楽家たちが加わる論争となります。それは次の世紀全体にわたって拡大され、19世紀中葉のバッハの「再発見」によって鎮静化を見出すことになるのです。

[東京バッハ合唱団のヨーロッパ演奏旅行で、ライプツィヒを訪れ演奏したのは、下記の3回でした。]

・第1回 (1983年8月11日、聖トーマス教会)。演奏：モテット3番、4番、カンタータ BWV 80、BWV 4。

・第2回 (1988年8月16日、聖トーマス教会)。演奏：モテット2番、3番、6番。

・第4回 (1997年8月13日、改革教会)。演奏：カンタータ BWV 150、BWV 21、モテット4番。

中でも第1回、初めて聖トーマス教会のギャラリーに立ち、歌った時の緊張感と充足感はいちあらわしがたいものがあります。]

[つづく]

次回公演予告・第116回定期演奏会

—バッハ・カンタータ日本語演奏—

カンタータ《主われらにいまさずば》BWV 178

カンタータ《抗いまた怯むはこころの常》BWV 176

カンタータ《呼びまつるイエスよ》BWV 177

カンタータ《あしたに輝く妙なる星よ》BWV 1

日時 ■ 2018年5月12日 (土)、14:00 開演

会場 ■ 武蔵野市民文化会館 (リニューアルオープン)

(JR 三鷹駅から徒歩、吉祥寺駅・武蔵関駅等からバス、等)

[参加団員募集] 練習開始：本年12月より。随時見学歓迎。